

2022年2月20日（顕現後第7主日、C年）牧師メッセージ

「罪を認め、悪口を言うものに祝福を祈ること」

（ルカによる福音書6：27-38）

司祭ヨセフ太田信三

クリスチャンでは無い方が礼拝に出られた際、感想をお伺いすると、「なぜ、あんなに自分たちを罪人だと言わなければならないのか。」と言われたことがあります。キリストを信じて、何も悪いことをしていないのに、罪人にさせられる、と言うのです。たしかに、わたしたちクリスチャンは、自らを罪人として認め、悔い改めることを大切にしていますが、それは信仰を異にする方からすれば、理解が難しいことなのかもしれません。しかし、教会は懺悔と赦しを大切にします。なぜなら、イエス様の前で、わたしたちの罪が明らかにされることは、わたしたちがまことに自由になるための道だからです。その罪が明らかにされるから、イエス様の愛を知ることが出来るからです。人は愛されたい、赦されたいと望んでいます。しかし、それを欲するがゆえに、裏切り、欺き合ってしまう。それが人間の罪です。どうしても自己愛に向かってしまう人間は、自らのみの充足を目指します。しかし、受けることばかりを求めた愛は、当然奪い合うことになります。嫉妬もあれば、裏切りもある。それを得るために人のものまで奪う。人はそうまでして自分を満たさなければ生きられないからです。結局、愛を求めていたはずなのに、いつの間にか愛から離れてしまう。これが、人間の罪です。愛と赦しを求める。それは何も間違っていない。けれども、それを求めている内に、知らぬ間に、愛からも赦しからも離れてしまうのです。このことは、わたしたちは、主イエスを十字架に付けた人々と同じように、知らぬ間にイエス・キリストから離れる存在なのだ、と言い換えることができます。なぜなら、イエス・キリストがわたしたちに今日の福音にて求めた愛は、自己愛にとどまっていたのは実践できないからです。敵をも愛すること。それをしたいとどんなに望んでも、人はその道から外れてしまうのです。罪人だからです。それゆえ、わたしたちは主イエスを十字架につけた人々と同じです。主イエスの「敵」であり、罪人です。しかし、わたしたちはわたしたち自身が罪人であることを知るなら、同時にその敵のために祈り、赦して下さった主イエスの愛を知ることができます。主イエスは十字架の上で、「父よ、彼らをお赦しください。自分のしていることを知らないのです。」と神に願い、ご自分を十字架につけた人間のために祈ってくださいました。主イエスこそまさに、今日の福音で説かれた愛を実践し、敵であるわたしたちを赦し、愛して下さるのです。そして、その愛ゆえに、信じられないことに、敵であったはずなのにわたしたちは神の家族とされているのです。愛と赦しの命をいただいているのです。「いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深い」のです。ですから、わたしたちは自分の罪を知るとき、敵をも愛する愛が「わたし自身」にも注がれていることを知るのです。その愛に触れるなら、もう奪い合い、騙し合って愛を獲得しようとすることから解放され、自由になれることでしょう。罪人であることを認めることから始まる、本当に自由に至る道に、わたしたちは招かれているのです。

敵を愛しなさい、という主イエスの話を聞いた弟子たちはきっと、「そんなこと出来っこない」と思ったでしょう。彼らが本当にそのように生きられるようになったのは、主イ

イエスを裏切ってしまい、しかし、ご復活の主イエスに出会い、赦されてからです。敵を愛し、与えるほどの愛とは、わたしたち自身の内から出てくるものではありません。主イエスの十字架上の赦しにわたしたち自身が与り、その愛をいただくから、わたしたちは愛を知ることができます。そしてその愛に触れて初めて、「敵をも愛する」こと、毎日のなかで「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」ということにチャレンジする力が与えられるのです。キング牧師が、非暴力を徹底する中の説教で、こう語っています。

「われわれは、人種差別を嫌悪しつつ、一方では人種差別主義者を愛すべきである。」まさに、この言葉の通りだと思います。完全に正しい人間はいません。神から離れてしまう罪人です。だから、過ちを犯してしまったら赦してもらいたい。愛に飢えているなら、愛されたい。その気持が分かるはずです。相手のうちにあるその求めを感じるなら、きつと憎しみは慈しみに変えられるはずです。そうであれば、「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深いものとなりなさい。」と言われている主イエスの言葉に従い、次に自分はその相手に対して何ができるのか考えることが出来るようになる、いや、すぐにではないかもしれませんが、少なくともその道が薄っすらとでも見えてくるはずです。

愛は与えることだ、と今日の福音は繰り返し語っています。もちろん、自分に暴力を与える存在なら逃げなければならないこともあります。もしかするとそのような時には罪悪感を憶えてしまうかもしれませんが、けれども自らを責める必要はありません。そのようなときでも、「悪口を言うものに祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」といわれるように、祈ること、それができれば十分です。その人に神の赦しがあるように、愛が注がれるように、祈ることです。あとは神にお委ねすれば十分です。またその祈りによって、そのあなたの思いから神さまの愛がにじみでて、いつかその人も神の愛を知ることになるかもしれません。それが、本当の勝利です。殴り合いで打ち負かすことも、爆弾を落として殲滅することも勝利ではありません。本当の勝利とは、自分も相手も神の愛を知り、互いが神の愛のもとに生きること、そういう素敵な世界にたどり着くこと、これが勝利です。

わたしたちはこの本当の勝利に向かい、チャレンジすることを通して、自分の力だけでは愛し、与えることなどできないことを知らされるでしょう。しかし、罪を知ることによって主イエスの愛を知るように、自分の無力さを知る中で、より深く主イエスの赦しや助け、愛の深さを知ることが出来るのです。まさに、パウロが「弱いときこそ強い」と言った通りです。そのチャレンジにおいてこそ、わたしたちは赦されていることを知り、人を赦し、愛する者へと変えられていきます。そして、わたしたち自身が赦され、愛をいただくから、わたしたちの内から神の愛が溢れます。ですから、与えるのはわたしたちであるようで、神なのです。わたしたちの内が枯れてしまっても、神の愛が枯れることはありません。ですから今日も、わたしたちの内に神から離れてしまう罪を見つめ、そこに注がれている神の愛を感じたいと思います。そして、その愛をいただいて、神の愛を携えて、愛することのチャレンジへ、この世界へと派遣されてまいりましょう。